

CONTENTS

ごあいさつ

センター長（看護学科長）長家 智子	1
副センター長（医学部附属病院看護部長）藤満 幸子	2

看護学教育研究支援センターとは

センター開設の背景と目的	3
センターの構成と事業内容	3
・教育研究実践支援部門	
・人事交流支援部門	
・国際交流支援部門	
センターの概要図	4
継続教育プログラムについて（教育研究実践支援部門）	5
・継続教育プログラムのモデルコース	
オンデマンド型の支援について（教育研究実践支援部門）	7

平成29年度看護学教育研究支援センター事業報告

「佐賀県看護職員キャリア形成システム支援事業」による補助金事業	8
・講演会の開催	9
・研修会（新規企画）	10
・e-learning コンテンツ作成	11
教育研究実践支援部門	13
人事交流支援部門	14
国際交流支援部門	15
センターの支援を受けて（体験談）	17
センター関連の研究業績	19
資料：e-learning コンテンツ活用状況および内容の評価	20
助成金等の受け入れ	24
センター担当者一覧	25

連絡先・ホームページアドレス	26
----------------------	----



「看護学教育研究支援センター」の活動の拡大

佐賀大学医学部附属看護学教育研究支援センター
センター長・看護学科長 長家 智子

佐賀大学医学部看護学科は、平成5年に九州初の4年制看護系大学として開設以降、地域の看護の質の向上に寄与し、地域医療に貢献してきました。

その中で、地域医療の向上のためには、様々なレベルにある地域の看護職者のニーズに合わせた体系的な看護学の生涯教育環境を整え、地域の看護職全体の質の向上を目指す必要があると考えました。

この課題に取り組むことを目的に、平成26年4月に看護学教育研究支援センター（以下、センターと略す）を設立し、4年間の活動を進めて参りました。この間、地域の看護職者のニーズの高い教育・研究・実践の支援や人事交流の支援、国際交流・国際看護活動支援を行うことを業務とし、多くの看護職の方に利用して頂き、設立の目的を果たすべく、活動できていると自負しております。

本年度、教育研究実践支援部門では、センター主催の研修会・セミナーに多くの看護職の方に参加して頂きました。個別の研究支援・指導により学会発表する方も増えてきました。継続教育プログラムの受講や附属病院と地域の病院間での人事交流も行いました。また、本学と台湾の輔仁カトリック教大学看護学部との相互交換留学が行われています。

さらに、「佐賀県看護職員キャリア形成システム支援事業」による補助金も2年目を迎えました。外部講師を招いた講演会を実施し、看護職者が自由な時間に学習できるe-learningシステムを完成させました。昨年度に続き今年度も2コンテンツ作成し、合わせて4コンテンツを県内の看護職者に利用して頂いています。佐賀県医師会のご協力により、県内医療機関のほぼすべてにe-learningの利用案内を送ることができました。今後、より多くの看護職の方々にご利用頂けるのではないかと考えております。

このように、センターの三部門は、地（知）の拠点として確実に地域の看護職者の継続教育やキャリア形成を支援し、地域の看護の質向上のために努力しています。設立時より、少しずつではありますが、支援の幅が広がっていると考えます。

今後ともご支援とご協力をよろしくお願いいたします。





看護学教育研究支援センターの1年を振り返って

副センター長・医学部附属病院看護部長

藤満 幸子

看護学教育研究支援センター（以下センターとする）は、今年で4年目を迎えました。昨年度に引き続き、附属病院においては、①教育研究実践支援部門では、専門・認定看護師によるスキルアップ研修会の開催、看護学科教員による看護研究の支援を受けての学会発表等で実績を積みことができました。②人事交流部門においては、富士大和温泉病院の褥瘡対策チームへの技術指導、ひらまつ病院訪問看護ステーションへの派遣、小城市民病院からの管理実践研修受け入れなど、看護職同士の地域連携が深まり、お互いの臨床看護師のキャリア形成に役立つことができました。③国際交流部門では、台湾輔仁カトリック教大学看護学部看護学科学生4名と中国浙江中医薬大学看護部看護学生4名の研修を短期間ではありましたが受け入れをし、国際化を意識するとともに言語の壁を実感しました。

今年度は、佐賀県補助事業である「地域医療構想の達成に向けた医療機関の施設または設備に関する事業」にて、地域の看護職のみならず在宅医療に関心がある方を対象に「在宅医療の現状と課題について」の講演会とパネルディスカッションの開催、また、e-learning 製作の協力をいたしました。

講演を通じて、地域包括ケアシステムの推進のために、多職種と考える在宅医療に向けて「暮らしと医療を支える」シームレスな（切れ目がない）看護提供システムの必要性を実感するとともに実践していく機会となりました。

今年度の活動を通じて、看護職者の教育・指導能力、研究能力、臨床実践能力、マネジメント能力等を高めるとともに、キャリア向上に寄与できたことを実感するとともに、これからもこのセンターが地域看護職のキャリア形成に貢献できるものとして活用していただけると幸いです。



センター開設の背景と目的

■背景

佐賀大学医学部看護学科は、佐賀県内唯一の看護系大学・大学院として高度な看護専門職者を育成し、地域における看護の質の向上に寄与することにより地域医療に貢献してきた。しかしながら、近年の更なる医療の高度化や専門化などの時代のニーズに応え得る高度な実践力・応用力や研究能力を持った看護専門職者はまだ県内に非常に少ない状況にある。

また佐賀県の医療課題として、高齢化、肝炎・糖尿病合併症などの慢性疾患対策や高いがん死亡率への対策、精神疾患対策、母子保健対策、訪問・在宅医療対策等があり、これらの医療ニーズに十分に答えられるように、地域の看護職の質の向上を目指した効果的な看護学の卒前・卒後継続教育や看護研究を支援する中心的な機関が地域に必要である。

■目的

センターは、看護学科教員、附属病院看護師が、地域の看護職者に、教育・研究・実践の支援や人事交流の支援、また国際交流や国際看護活動支援を行うことにより、地域の病院・教育機関・行政機関等で働く看護職者の教育・指導能力、研究能力、臨床実践能力、マネジメント能力等を高めるとともに、キャリア向上を図り、地域の看護学の発展、ひいては地域医療に貢献することを目的とする。

センターの構成と事業内容

■教育研究実践支援部門

看護職者の教育・指導、実践、研究の支援を行う。

- ・看護学科、附属病院、地域の病院、教育機関、行政機関等に勤める看護職者において、教育・指導、実践に関する支援が必要な場合の具体的な支援計画の作成、実施、管理に関すること（テラーメイドの継続教育プログラムの提供やオンデマンド型の教育研究実践支援）
- ・生涯教育に向けた種々の研修会の開催や研修プログラムの作成、訪問看護師養成、その他の教育研究実践支援の業務に関すること
- ・看護研究の計画立案から学会発表までの研究活動に関すること

■人事交流支援部門

看護学科・附属病院・地域の病院・行政機関（地域・国）等に勤める看護職者間の人事交流による相互のキャリア発達支援を行う。

- ・看護学科と附属病院看護部、地域の病院看護部や行政機関等との人事交流に関すること、また交流に関連した指導体制や交流後の支援体制に関すること
- ・看護学科と附属病院、地域の病院や教育機関、行政機関、看護協会との連携に関すること

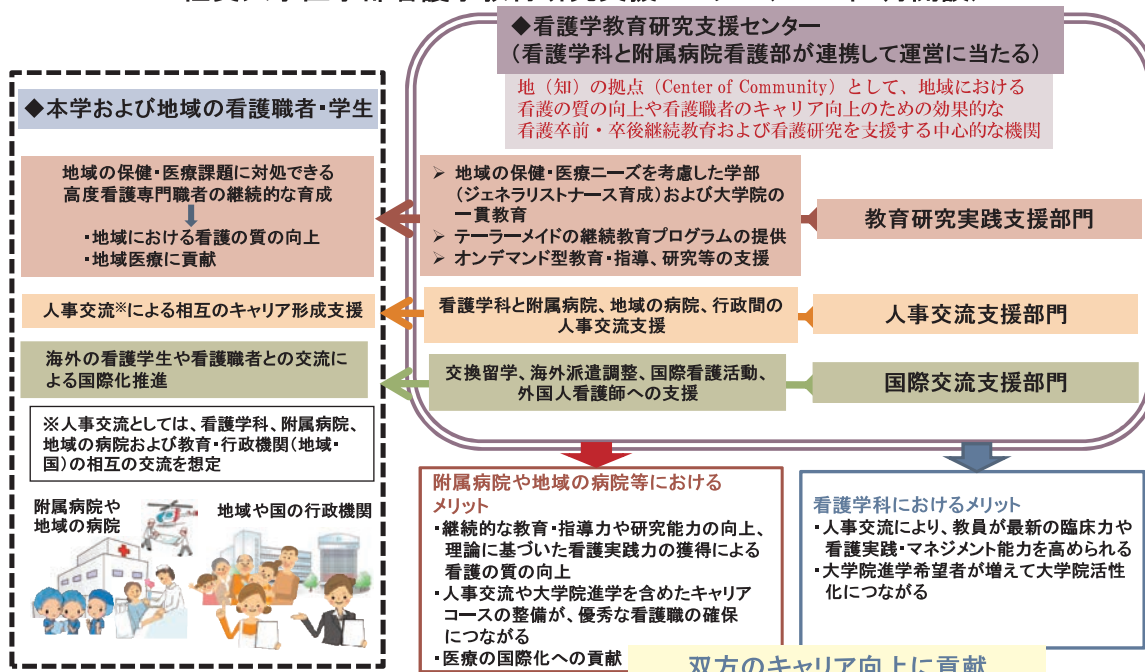
■国際交流支援部門

国際交流（留学・派遣の調整）や国際看護活動の支援を行う。

- ・海外からの看護職者の短期留学や交換留学の受け入れ、海外の看護系大学などへの派遣の調整に関すること
- ・国際看護活動の支援に関すること
- ・外国人看護師（候補生）への教育支援に関すること

センターの概要図

佐賀大学医学部看護学教育研究支援センター(2014年4月開設)



本学は佐賀県内唯一の看護系大学として、看護職の基礎教育だけでなく、卒後の良質かつup to dateな継続教育も担う。

地域の看護の質の向上とともに看護職者のキャリアアップにつながる

自己と地域のニーズに沿う看護継続教育プログラム

概要

新設された佐賀大学医学部看護学教育研究支援センターを中心に、看護学科・附属病院・地域の病院・行政・看護協会等が連携して、地域の医療課題解決に向けた看護職者の育成とキャリア形成を行うシステムを確立する

背景・課題

- 佐賀県の医療課題として、高齢化、肝炎等の慢性疾患・精神疾患対策や訪問・在宅医療対策、母子保健等が挙げられる
- 課題に的確に対処できる臨床能力を持った看護職者の継続的育成が必要である

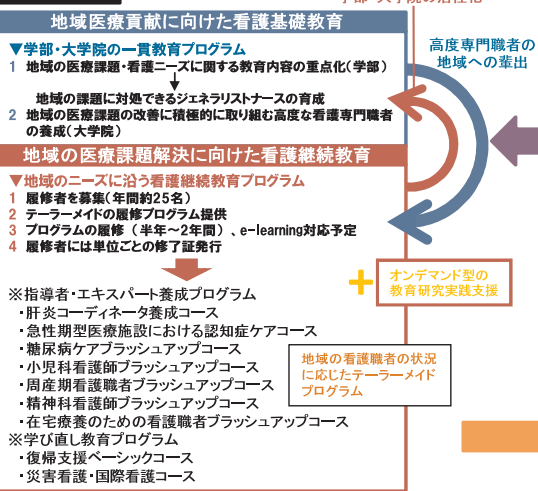
現状

- 地域の看護職全体の質の向上を目指すための体系的な生涯教育環境は十分に整っていない

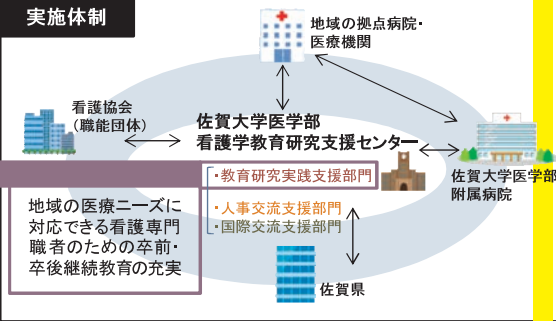
成果

- 地域の看護職全体の質の向上、長期的には地域医療に貢献
- 地域の看護職者のキャリア向上
- 大学および大学院の活性化と教育の質向上につながる

取組内容



実施体制



学部・大学院における教育の質の向上
地域における看護の質の向上、看護職者のキャリア形成

地域医療に貢献

継続教育プログラムについて（教育研究実践支援部門）

受講者の希望に基づいて、教育研究実践支援部門の教員の助言を受けながら、受講者が実行可能な教育プログラムを作成する（学部や大学院の講義・演習・附属病院での研修等を組み合わせることが可能）。受講者は働きながら、自分のニーズに合わせたテーラーメイドのプログラムに沿って教育を受けることが出来る。今後、e-learning システムを立ち上げ、ニーズの高い授業から遠隔授業に対応する予定である。受講期間は半年～2年間とし、受講料は原則無料とする（資料代は別途徴収）。なお、附属病院での研修を行う場合には、誓約書が必要となる（看護職賠償責任保険に加入している必要あり）。

継続教育プログラムの履修終了時には、原則として試験を行い、科目ごとに、あるいはコースごとに修了証を発行する。大学院開講科目で履修した単位は、その後本学大学院に進学した場合の既修得単位として認定可能である（事前の申請が必要）。

継続教育プログラムのモデルコース

■ 専門・認定看護師のブラッシュアップコース

《モデル1：肝炎コーディネーター養成プログラム》

目標：肝炎の予防、早期発見、早期治療に向けて他職種と連携し、専門的な看護を提供できる人材を育成する。

	科目名	単位数	時間数
基礎科目 (大学院)	慢性看護論	2	30時間
	慢性看護援助論Ⅰ	2	30時間
	がん看護学特論	1	15時間
選択必修科目 (医学部)	佐賀県肝炎コーディネーター育成講座	1	15時間
(看護部)	専門・認定看護師スキルアップ研修：がん看護	1	15時間

※他に大学院の必修、専門選択必修のなかから3単位を履修する。関連病棟：4階東、総合・専門外来

《モデル2：急性期型医療施設で認知症ケアに携わる看護師のためのプログラム》

目標：急性期型医療施設で入院加療を必要とする認知症患者と家族が安心して医療を受けられる環境調整を行え、専門的看護実践能力を備えた看護師を育成する。

	科目名	単位数	時間数
基礎科目 (大学院)	看護教育論	2	60時間
	コンサルテーション論	2	60時間
	老年看護特論	1	30時間
選択必修科目 (センター)	臨床・教育事例検討演習	1	30時間
	認知症ケア（仮称）	1	30時間

※他に大学院の必修、専門選択必修のなかから3単位を履修する。

《モデル3：糖尿病患者の治療に対する意思決定を支援するためのプログラム》

目標：糖尿病とともに生活してきた患者の軌跡を理解し、患者の治療における意思決定と療養生活を支援することができる看護師を育成する。

	科目名	単位数	時間数
基礎科目 (大学院)	看護倫理	2	30時間
	慢性看護論	2	30時間
	慢性看護方法論Ⅰ	1	15時間
	慢性看護方法論Ⅱ	1	15時間
選択必修科目 (看護部)	専門・認定看護師スキルアップ研修： 慢性疾患看護、糖尿病看護フットケア	1	15時間
(センター)	慢性病者の生活を支援するシステム	1	15時間

※他に大学院の必修、専門選択必修のなかから2単位を履修する。
関連病棟：4階東、5階東、1階北病棟北、総合・専門外来

■周産期および小児医療に携わる看護職のブラッシュアップコース

《モデル4：小児医療に携わる看護職のブラッシュアッププログラム》

目標：子どもと家族のヘルスプロモーション能力育成をめざした子育て支援ができる看護職を育成する。

	科目名	単位数	時間数
基礎科目 (大学院)	小児看護特論	1	30時間
	小児看護方法論	1	30時間
	小児看護対象論	1	30時間
選択科目 (看護部)	専門・認定看護師スキルアップ研修：新生児看護	1	15時間
(センター)	小児看護学実践演習	1	30時間
	臨床・教育事例検討演習	1	30時間

※他に学部の小児の専門科目、大学院の必修、専門選択必修のなかから4単位を履修する。
関連病棟：小児病棟

■看護基礎・継続教育担当者のブラッシュアップコース

《モデル5：看護専門学校教員のブラッシュアップのためのプログラム》

目標：看護教育の質向上のために、授業改善の取り組みができる教員を育成する。

	科目名	単位数	時間数
基礎科目 (大学院)	看護教育論	2	60時間
	看護倫理	2	60時間
	看護管理	2	60時間
選択科目 (センター)	臨床・教育事例検討演習	1	30時間

※履修者の専門に関わる学部、大学院の科目のなかから3単位を履修する。

《モデル6：臨床教育助産師の育成プログラム》

目標：看護学生、助産師学生や新人助産師への教育的指導を行うことができる助産師を育成する。

	科目名	単位数	時間数
基礎科目 (大学院)	看護教育論	2	60時間
	看護倫理	2	60時間
	母性看護特論	1	15時間
	母子看護展開論	1	30時間
(センター)	臨床・教育事例検討演習	1	30時間

※大学院の必修、専門選択必修のなかから3単位を履修する。関連病棟：2階東病棟、NICU

■一般看護者ブラッシュアップコース

《モデル7：臨床で看護研究を行う看護職のためのブラッシュアッププログラム》

目標：臨床の問題を研究的に解決できる人材を育成する。

	科目名	単位数	時間数
学 部	看護統計学	1	30時間
	看護研究入門	1	30時間
	看護倫理	1	15時間
大学院	看護理論	2	30時間
	看護研究概論	2	60時間
センター	看護研究演習（仮）	2	60時間

《モデル8：精神科看護師のブラッシュアッププログラム》

目標：精神科看護師の看護実践能力の向上を目指す。

	科目名	単位数	時間数
学 部	精神保健看護論	1	15時間
	精神看護援助論	2	30時間
大学院	看護理論	2	60時間
	看護研究概論	2	60時間
	精神看護学特論	1	30時間

関連病棟：精神科病棟

オンデマンド型の支援について（教育研究実践支援部門）

地域の看護職のニーズに応じて、教育・研究・実践に関する、より自由度の高い支援を行う。地域で働く看護職者が、教育指導や実際の研究、臨床実践等において支援が必要な時に、適宜、専門家の助言・指導や研究支援が受けられるシステムである。

「佐賀県看護職員キャリア形成システム支援事業」による補助金事業

平成27年度に申請していた「佐賀県看護職員キャリア形成システム支援事業」による補助金事業の採択が決まり、526万円（補助額は1/2の263万円）の事業を平成28年10月より開始している。

平成29年度に実施した事業を以下に示した。

区分	内容
教育実践支援事業	<ul style="list-style-type: none"> ● 新規研究支援20件、平成27年度からの継続17件 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 研究支援のうち院内発表18件 院外発表11件 次年度院外発表予定5件 ● 第3回 SUN-GO フォーラム ゆめタウンさが (2017.6/9) 参加者349名 ● 小児看護エキスパートナース養成講座 3回 (2017.7/28,9/22,11/24) 参加者37名 ● 解剖学スキルアップ研修 1回 (2017.7/5) 解剖学実習室 参加者5名 ● 附属病院におけるスキルアップ研修 8回 参加者198名 ● 分娩介助技術指導 7回 (2017.9/28,10/16,11/22,12/19,1/22,2/14,3/22) <ul style="list-style-type: none"> ➢ 佐賀県医療センター好生館 参加者39名 ● 糖尿病医療における専門者育成 2回 参加者6名 ● e-learning 教材の配信 (2017.4/1～) <ul style="list-style-type: none"> ① 感染対策 ② フィジカルアセスメント (呼吸, 循環器系) ● e-learning 教材の作成と配信 (2018.1/31より配信) <ul style="list-style-type: none"> ① 心肺停止状態への対応 ② 脳神経系の異変への対応 ● e-learning 利用登録者 (2018.3/23現在) 35施設 221名 ● e-learning 評価: 4施設168名を対象に実施 (資料参照 P20-24) ● 継続教育プログラムの受講 (2科目) (2017.10/2-2018.1/27 各15回) 1名 ● 講演会「在宅医療の推進に向けての退院支援」(2018.3/17) <ul style="list-style-type: none"> ➢ 参加者 40施設 10職種 107名 ● 報告書作成
人事交流支援事業	<ul style="list-style-type: none"> ● 小城市市民病院看護部と附属病院看護部との人事交流マッチング支援 <ul style="list-style-type: none"> 小城市市民病院看護師8名 (師長・副師長) の看護管理に関する研修支援 期間: 2017.7/18,19,21 内容: 附属病院の看護師長または副師長のもとでシャドウイングを実施 ● ひらまつ病院訪問看護ステーションと附属病院看護部の人事交流マッチング支援 <ul style="list-style-type: none"> 附属病院看護師1名のひらまつ病院訪問看護ステーションでの研修支援 期間: 2018年1月～3月 内容: 附属病院の看護師がひらまつ病院訪問看護ステーションで研修を受け、訪問看護師として勤務
国際交流支援事業	<ul style="list-style-type: none"> ● 外国人看護師 (候補生) への学習支援 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 佐賀大学医学部看護学科での学習サポートを希望する織田病院外国人看護師候補者1人について、講義への参加や振り返りを中心に支援を行うよう計画したが、希望がなかった。 ● 台湾・輔仁カトリック教大学および中国浙江中医薬大学との交流の実施 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 台湾・輔仁カトリック教大学より看護学生の受け入れ (2017.7/10-7/18) 4名 ➢ 中国・浙江中医薬大学より教員および看護学生の受け入れ (2017.11/27-12/4) 教員2名 看護学生4名 ➢ 台湾・輔仁カトリック教大学へ佐賀大学医学部看護学科学生4名を派遣 (2017.8.21-28) ➢ 台湾・輔仁カトリック教大学教員および実習病院である新光病院看護師を対象とした講演: 日本の看護教育制度について、佐賀大学医学部教授が講演
※各年度報告書の作成	

講演会の開催

地域包括ケアの推進に伴い、各々の病院では早期から関わる患者・家族の意向や生活を見据えた退院支援の体制づくりが進められている。退院支援の体制づくりは少しずつ整えられつつあるが、多職種協働や在宅医療については課題も多く抱えている。

今年度は、長年、在宅医療に携わってこられた在宅療養支援診療所の満岡聡院長にご講演と、パネルディスカッションとして退院支援に関わる多職種の方にご提案をいただき、「それぞれの立場でこれから私たちは何をすべきか」の示唆を得られた講演会となった。

アンケートでは、全員が「今後の業務の参考になった」と答えた。

日 時：平成30年3月17日(土) 13:30~16:30

場 所：佐賀大学医学部 看護学科棟1階 (5101)

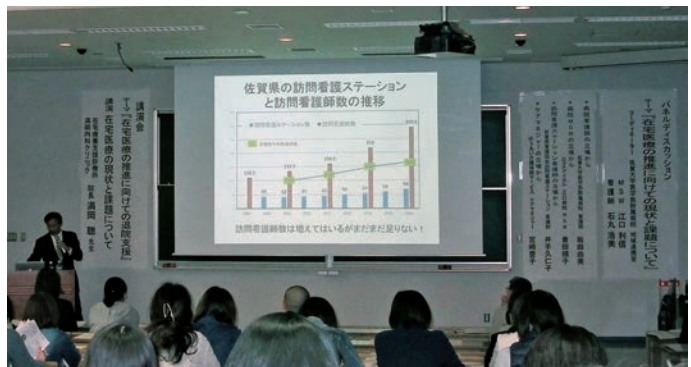
参加者：107名(院内24名・院外83名)

職種は看護師や保健師、MSW・CS・教員や学生など多くの参加があった。

講 演

講 師：在宅療養支援診療所 満岡内科クリニック 院長 満岡 聡 氏

テーマ：在宅医療の現状と課題について



パネルディスカッション

コーディネーター：佐賀大学医学部附属病院 地域連携室 MSW 江口 利信

看護師 石丸 浩美

パネラー：佐賀大学医学部附属病院 看護師 坂田 由美

ロコメディカル 江口病院 MSW 倉田 順子

佐賀県看護協会訪問看護ステーション 看護師 井手 久仁子

ゆうあい介護保険サービス ケアマネージャー 宮崎 豊子



研修会（新規企画）

看護師のための臨床に役立つ解剖学スキルアップ研修

実施日：平成29年7月5日(水) 18:30～20:30

参加者：人数：男性2名、女性3名

所属機関：ひらまつ病院3名、社会医療法人 謙仁会1名、医療法人 水上医院1名

経験年数：5年（2名）、8年（1名）、13年（1名）、36年（1名）

解剖見学：全員、学生時代に大学（佐賀大学含む）で行われた解剖見学に参加
経験（見学の際に教員または医学部生による説明を受けた）

研修内容：ご遺体の見学をしながら、臓器やその構造などの分かりづらい点について参加から教員が質問に応じて解説し、人体の構造や機能について理解を深める

【参加の動機】

- ・病態生理の理解に役立つと思った。
- ・学生の時に解剖見学の経験はあったが、看護師としての臨床経験から得た知識を持って見学することで学びが深まり、現場で活かせると思った。

【参加後の感想】

- ・手術療法や医療処置などについてイメージが付きやすいと思う。
- ・患者の訴えに対して、部位や構造をしっかりと捉えることができると思う。
- ・診察の時にも解剖生理について学んだことが活かせると思う。
- ・患者へ説明する際に今回の学びが活かせると思う。
- ・病態や現場とリンクさせて考えられる。

【担当教員の感想】

- ・参加者から質問や疑問点などの活発な発言があった。
- ・学生時代とは異なり、臨床経験後の見学はより臨床の看護実践に活かせる可能性が大いに期待できる。
- ・今回の見学を臨床に活かそうとする意欲、活かせるという発見があったことから、本研修に対する潜在的ニーズは高いと感じた。

e-learning コンテンツ作成

1. 目的

本事業では、佐賀県内の看護職者のキャリア形成システムの一環として、e-learning 教材を作成し、県民に安全で質の高い看護の提供を支援する。

2. コンテンツ開発の過程

1) 教材内容の決定

佐賀県内の医療機関150施設、訪問看護ステーション40か所に e-learning 教材の希望調査を行った。その結果、43施設からの回答を得た。今年度は、希望が多かった「急変時の対応」というテーマで「心肺停止状態への対応」と「脳神経系の異変への対応」の2コンテンツを作成することに決定した。また、学習確認のための正誤テストを併せて作成することとした。

2) 撮影に向けての準備

映像コンテンツ用のシナリオ、スライドを作成。また、撮影当日の役割分担（撮影班、音声班等）を決めリハーサルを行った。

3) 撮影・編集

撮影日は、11月9日「心肺停止状態への対応」と「脳神経系の異変への対応」とともに佐賀大学医学部看護学科・成人老年看護学実習室で行った。また、本事業担当教員同席のもと複数回に渡り依頼業者と編集を行った。



写真1【撮影隊メンバー】



写真2【打合せにも、熱が入りました】

3. この教材を作った思いと使い方

今回は「急変時の対応」というテーマで、「心肺停止状態への対応」と「脳神経系の異変への対応」の2コンテンツを作成した。「心肺停止状態への対応」では、病棟や外来などの病院内における急変時の対応について、意識レベルの確認や心肺蘇生法（以下CPR）、AEDの装着、医療者間の連携など、臨床の現場で実践できるように作成した。特に新人看護師やCPRの経験が少ない看護師に、技術の習得とエビデンスを押さえる学習機会としてほしい。また、脳血管疾患は日本人の死因の第4位であり、患者数は年間約120万人（平成26年患者調査の概況：厚生労働省）と報告されている。高齢化が加速する中、入院中に脳血管疾患を発症するケースも多い。

また脳血管疾患は治療開始までに要した時間の長短が、発作後の予後（命が助かるか否かや、麻痺の程度）に大きく関係する。そのため、「脳神経系の異変への対応」では、脳血管異変時の早期発見と対応について、運動機能や意識レベルの評価などの実際を動画で紹介した。

今回作成した e-learning 教材が、佐賀県内の看護職者のキャリア形成の一助となるよう活用して欲しい。



写真3 【心肺停止 看護師間の連携】



写真4 【カメラチェック中】

4. 撮影中のエピソード

- ◇ e-learning 教材の作成メンバーとして、シナリオ作成、撮影、編集等に携わった。撮影は事前の物品準備や患者、看護師役との打ち合わせや調整、撮影メンバーの役割分担などの重要性を感じた。また、動画や静止画などをどのように組み入れるかなど実際の映像を確認しながら行う作業は長時間に及んだが、対象者に適した学習教材を作成するという視点で大変勉強になった。（武富）
- ◇ 意識レベルの評価は誤差があってはいけないが、文字や写真だけでは、評価者によって捉え方が異なることもあり、統一した評価が困難であると感じていた。今回、動画で評価方法を見ることでイメージが付きやすく、評価の捉え方を統一することが可能になるのではないかと思った。今後は、統一した評価方法を目指して e-learning の活用を広めていきたい。（小西）

5. 担当者

本事業は、古賀明美を代表者として以下のメンバーで行った。

	医学部看護学科	佐賀大学医学部附属病院
心肺停止状態への対応	藤本 裕二 坂 美奈子 杉本 健太	武富由美子 古野 貴臣 浅田 有希
脳神経系の異変への対応		松尾 照美 城島 智之 中野 英代 岸川ひとみ 小西 有望

教育研究実践支援部門

部門責任者 古賀 明美

教育研究実践支援部門は、部門責任者を含め、医学部看護学科教員16名と佐賀大学医学部附属病院看護部看護師2名が担当している。本部門では、佐賀県内で教育・指導、研究、実践に携わっている看護職を対象に、研究支援と継続教育を行った。また、研修会等の講師として、地域の看護職のレベルアップに貢献した。平成29年度の支援状況について報告する。

(1) 継続教育としての実践レベルアップ研修

継続教育プログラムとして「小児看護エキスパートナース養成講座」に37名（2018年2月時点）、「第3回 SUN-GO フォーラム」には総数349名が参加した。看護部主催の「平成29年度スキルアップ研修会」は8回開催され198名が参加し、そのうち院外受講者40名であった。また、「糖尿病医療における専門者育成」では6名の糖尿病コーディネイト看護師を育成した。本年度の新しい企画として開催した、「第1回看護師のための臨床に役立つ解剖学スキルアップ」には、5名が参加した。人体の部位や構造などの分かりづらいつ点について質問を受け、それに答える方法で実施した。参加者は、今回の見学を臨床に活かそうとする意欲が高く、潜在的なニーズは高いのではないかと考えられた。

現場の求める内容に沿って看護学科の教員や医学部附属病院看護部の看護師が病院や学校、看護協会、助産師会などへ出向き、研修や講演などの講師を務めている。今年度は、講習会・研修会への講師の派遣は146件となった。

昨年度に引き続き、佐賀県健康福祉本部と連携し県内の小規模病院や診療所で働く看護職に向けたe-learningシステムの開発を進めている。本年度は、e-learningコンテンツ活用状況および内容の評価（資料参照20-24ページ）を実施するとともに、e-learning教材の「心肺停止状態への対応」「脳神経系の異変への対応」の2つのコンテンツを作成し、配信中である。さらに、センター主催で看護職の実践レベルアップのために、在宅医療の推進に向けての退院支援に関する講習会を企画した。

(2) 研究支援

研究支援については、「研究支援利用のご案内 利用者版」を作成し、申請者が利用しやすい環境を整えた。研究支援の申請があれば、申請目的に応じて、その分野に最もふさわしい教員を決定し、研究計画書の作成から学会等での発表まで、マンツーマンで指導している。

平成27年度からの継続支援4件、平成28年度からの継続支援13件、平成29年度の新規申請20件、合計37件に対応した。申請施設数は、平成27年度および平成28年度からの継続分は6施設、平成29年度は8施設であった。研究支援のうち、全国規模の学会発表8件、地方会での学会発表3件であった（平成29年4月～12月）。研究支援を受けた申請者の中には、さらに看護研究について学びを深めるために、大学院への進学を決めた者がいた。

人事交流支援部門

部門責任者 田淵 康子

人事交流支援部門は、部門責任者を含めて医学部看護学科教員8名と佐賀大学附属病院看護部看護師1名の合計9名が担当している。本部門では、看護職者相互のキャリア向上を目指して、看護学科・地域の病院・行政機関の間での人事交流を支援している。平成29年度は、小城市民病院の看護師8名、本学附属病院看護師1名がひらまつ病院訪問看護ステーションとの人事交流を行った。

ひらまつ病院訪問看護ステーションとの人事交流は、平成29年に日本看護協会が示した「病院から訪問看護ステーションへの看護師出向一ガイドライン試案一」をもとに、本学医学部附属病院とひらまつ病院訪問看護ステーションが様々な事務的手続きをクリアしながら取り組んだ初めての事業である。病院看護師の在宅療養支援能力の向上、訪問看護師の看護実践能力の向上、病院と訪問看護ステーションの連携強化など様々な効果が期待できる。

小城市民病院との人事交流

交流者名：桑原美穂、片淵浩子、深町明美、高塚幸子、木戸美佐子、小山洋子、鬼崎京子、溝口浩子

期 間：平成29年7月18～21日

場 所：医学部附属病院看護部

目 的：大学病院の副看護師長または看護師長のもとでシャドウイングを行い、その役割を学び、今後の看護活動に活かす。

成 果：附属病院における労務管理や現任教育、副看護師長または看護師長の役割について理解できた。それらの学びを通して、自施設における課題を見出すことができた。

ひらまつ病院訪問看護ステーションとの人事交流

交流者名：石井美智子

期 間：平成30年1月1日～3月31日

場 所：ひらまつ病院訪問看護ステーション

目 的：訪問看護を利用しながら在宅療養している患者に対する支援の実際を知る。

成 果：訪問看護の実践を通して、在宅支援の視点とスキルを身につけることができた。入院中、または、外来通院中の患者やその家族に対する個別的な支援について考える機会となり、今後の看護実践に大いに役立つ成果が得られた。

国際交流支援部門

部門責任者 新地 浩一

国際交流支援部門は、部門責任者を含めて、医学部看護学科教員4名と佐賀大学医学部附属病院看護部看護師1名の合計5名が担当している。平成27年2月に、看護職の国際交流を推進するために副部門責任者を置き、さらに支援の内容によっては、他部門の教員の協力を得て、支援を行う体制を取っている。

本部門では、看護職や看護学生の国際交流の支援、国際医療協力活動への看護職の派遣などを実施している。以下に、平成29年度の主な活動を報告する。

(1) 交換留学支援

平成29年7月10～18日に、台湾の輔仁カトリック教大学看護学部看護学科2年生4名が佐賀大学医学部を訪問し、夏季交換留学を実施した（日程表参照）。

また、平成29年8月21～28日には、佐賀大学から看護学科4年生4名と教員2名が、台湾の輔仁カトリック教大学関連病院を訪問して、有意義な研修を実施した。



◀ 7月11日 医学部長への表敬訪問
台湾・輔仁カトリック教大学看護学部学生

Summer Exchange Program 2017 for FJU nursing students

DATE	Schedule (Lectures)
7/10 (Mon)	Arrival to Fukuoka Airport : 21:20 Arrival to the Hotel Toyoko Inn : 22:00
7/11 (Tue)	AM 1) Arrival to Saga University : 10:00 2) Orientation of Saga University and Introduction of FJU students. PM Visiting University Hospital 3) Visit of Dean Hara (15:00-15:20) Visit of Director Fuzimitsu (Head Nurse of the Univ. Hospital) 4) Visiting Univ. Hospital Wards, ECU, and Doctor Helicopter.
7/12 (Wed)	AM 1) Disaster Nursing Lecture 2) START Triage Exercise PM 3) Lecture of home care nursing in Japan 4) Visiting the Nursing small-scale multi-functional home care, Accompanying a visiting nurse

7/13 (Thu)	AM 1-2) Microscope Histology Exercise PM 3-4) Visit of Service Center for psychiatric patients (Community care of psychiatry nursing)
7/14 (Fri)	AM 1) International Disaster Relief (Lecture and exercise) 2) Adult Nursing Lecture PM 3) Visiting University Hospital Wards (ICU/CCU) 4) Summary of the lectures of summer exchange program
7/15 (Sat)	Saga University Museum, Saga Prefectural Museum, Saga Castle visiting
7/16 (Sun)	Study of History and Culture in Saga Area, Sightseeing etc.
7/17 (Mon)	AM : Disaster Nursing Education PM : Free time, and Preparation for Departure
7/18 (Tue)	Departure from Fukuoka Airport : 10:00

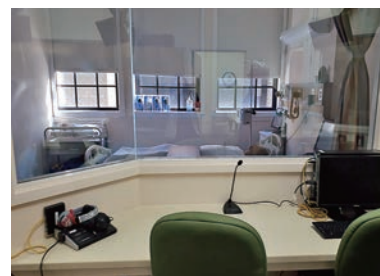
また、平成29年11月27日～12月4日に、中国の上海にある浙江中医薬大学看護学部から教職員3名と看護学科2年生4名の短期留学を受け入れた。浙江省からの短期留学の受け入れは平成29年度が初めてである。台湾の輔仁カトリック教大学との交換留学の研修内容とほぼ同じ内容で効果的な研修を実施した。

(2) 看護教員の海外研修に対する支援

平成29年8月28日～9月2日に、看護教員1名の海外における研修支援を実施した。この海外派遣は、ハワイ大学における効果的なシミュレーション教育を研修することを目的とし、ハワイ大学 JABSOM の Sim Tiki Simulation Center と Chaminade 大学看護学部を視察した。効果的な教育方法に関する貴重な情報を得ることが出来た。

シミュレーション教育で最も重要なことは、“質の高いデブリーファ－*” が学習者に対して働きかけることである。

そのために、基礎知識（看護学部教員）－シミュレーション教育（デブリーファ－の訓練を受けた者）－シミュレーター管理（事務）－教育評価（看護学部教員とシミュレーション教育者）、それぞれを上手に分業、連携しあう組織作りを構築していた。



(写真右) Chaminade 大学看護学部のシミュレーションセンター

(写真左) ハワイ大学 JABSOM の Sim Tiki Simulation Center JABSOM の2階一角にある。主にシミュレーション教育を行う指導者養成研修等を担っている。



*：デブリーフィングを行う教育者を指す。学習者に振り返りと課題を発見させ、学習意欲を引き出す重要な役割を担う。

センターの支援を受けて（体験談）

教育研究実践支援部門 研究支援

研究支援を受けて

国立病院機構 肥前精神医療センター 森田 康正

今回、佐賀大学医学部附属看護学教育研究支援センターの研究支援を受けて、「自殺未遂者に対する精神科救急病棟看護師の態度の特徴と特性的自己効力感の関連」のテーマで看護研究を行いました。

看護研究を進める際には、先生よりデータの分析方法とその意味を教えて頂き、論文作成では、結果から導き出す考察について御指導を受けました。

看護研究は、平成29年度第24回日本精神科看護専門学術集会で発表することができました。研究活動を通して、研究したことをわかり易く表現し相手に伝えることの大切さと、意見交換を通して自分の視野が広がることを実感できました。

今後、研究結果を看護師の教育や病棟の業務改善に役立てていきたいと思っています。

人事交流支援を終えて（体験談）

人事交流支援部門

ひらまつ病院訪問看護ステーションとの人事交流を終えて

佐賀大学医学部附属病院 看護部 石井美智子

訪問看護出向事業で、3ヶ月間ひらまつ病院訪問看護ステーションに行きました。外来で継続看護をしている時、自分が地域医療や社会資源について十分理解できておらず、実際に患者が在宅でどのような社会資源を使って過ごしているのか実際に見たいと思ったのがきっかけでした。最初の1ヶ月間は同行訪問が主で、看護ケアの方法もその家にあるものや持参した用具を使ってケアを行い病棟とは違う大変さを感じました。患者がどのような社会資源を使って過ごしているのか実際に見ることもでき、たくさんの事を学ぶことができました。2ヶ月目より1人で訪問することもあり、最初は責任とプレッシャーに緊張の毎日でしたが、人工肛門や褥瘡ケアの事で病院の皮膚・排泄ケア認定看護師に相談に行き、アドバイスを受けることもありました。病院看護師として在宅支援の視点とスキルを身に付けたことで、今後も患者・家族に対して個別的な支援ができるようにしたいと思います。



前列 左から2番目が石井さん
ひらまつ病院訪問看護ステーションのスタッフとともに

佐賀大学医学部附属病院での管理実践研修を終えて

小城市民病院 高塚 幸子

平成29年7月18～20日に看護師長、主任の計8名が、教育並びに業務改善を目的に、佐賀大学医学部附属病院看護部と人事交流の機会をいただきました。日々これで良いのかと疑問を持ちながらも、業務に流されていたのが現状でした。病棟の見学、カンファレンスにも参加させていただき、看護師長、副看護師長のシャドーイングを行いながら貴重な時間を体験しました。この体験を人事交流の参加者でどのように感じ、何ができるのかを検討するため看護部マネジメント会議を開始しました。自部署では、佐賀大学医学部附属病院で行われていた日勤業務でのリーダー2人体制に着目し、これまでのリーダーの役割について見直しを行いました。カンファレンス・病棟会で提案し、まずチーム別で一括になっていた処置表を個人表に変更し評価・修正を繰り返す行くと同時に、指示受け担当・ケア担当のリーダー2人体制に変更しました。これまで、終日指示受けに追われ患者把握にまでは至っていなかった状況が徐々に改善傾向にあります。またリーダーの責任の所在が明確となり、病棟全体の雰囲気も良くなったように思います。病院機能や看護体制に違いがあるため、すべてを取り入れることができるわけではありませんが、当院の特色を活かしより良い看護を提供できるよう日々スキルアップできればと思います。

国際活動を終えて（体験談）

国際交流支援部門

輔仁カトリック教大学医学部との夏季交換留学プログラムに参加して

佐賀大学医学部看護学科4年 牧山 千秋

私は、平成29年8月21～28日、輔仁カトリック教大学の関連病院である新光呉火獅紀念醫院（台北市）における短期留学プログラムに参加させていただきました。

今回は新光呉火獅紀念醫院の病棟見学を中心に、CCCシステムなど新しい電子カルテのシステムや医療安全の管理状況、リハビリテーション、訪問看護、退院カンファレンスについて学びました。この体験を通し、台湾における看護では新しい方法を積極的に取り入れ、急速な発展を遂げていることを体感しました。また、台湾には多様な文化を受け入れる価値観があるのではないかと考えました。さらに、日本の看護の良さや課題についても考察することができました。

グローバル化が進む現代の中で、多様な価値観や背景を持つ患者への看護を提供し、医療従事者と協働することが求められます。今回の短期留学を通して、フラットに物事を受け入れることや互いの違いばかりに注目するのではなく、その優れた点に注目する視点の重要性に気づくことができました。何より、国際交流において最も重要なことは、「伝えよう」「分かりたい」という心構えであることを学ぶことができました。

最後になりましたが、今回の留学に多大なご支援をいただきました看護学教育研究支援センター（国際交流支援部門）の皆様にお礼申し上げます。今回の留学での学びを活かし、4月から国際医療の発展に貢献できる看護師になれるよう尽力致します。

センター関連の研究業績

学会発表

1. 青野沙織, 山口紗和, 田竈康洋 (佐賀大学医学部附属病院): ICDSC 導入による ICU 看護師のせん妄への意識の変化. 第1回日本集中治療医学会九州支部学術集会. 2017. 5. 13
【研究支援: 末次典恵】
2. 藤木史子, 中野礼子, 砥上成美 (肥前精神医療センター): 興奮, 易刺激性・不安定性, 脱抑制がある認知症患者の行動変容について. 第18回日本認知症ケア学会大会. 2017. 5. 26-27
【研究支援: 藤本裕二】
3. 前田祥子 (伊万里有田共立病院): 身体拘束判断基準フローチャート導入による拘束解除に対する看護師の意識の変化. 第57回全国国保地域医療学会. 2017. 9. 20-21
【研究支援: 末次典恵】
4. 田中幸道 (精神医療センター): 破衣行為を呈する重症心身障害患者に対する看護実践の内容. 第43回日本重症心身障害学会学術集会. 2017. 9. 29
【研究支援: 藤本裕二】
5. 永尾勇, 樋口裕也, 生島節子 (肥前精神医療センター): 動く重症心身障害病棟に勤務する看護師のケアリング行動の実態と関連要因. 日本看護協会 第48回精神看護学術集会. 2017. 9. 29
【研究支援: 藤本裕二】
6. 宮崎マズミ, 吉原久美子 (佐賀県医療センター好生館): 緩和ケア病棟における看取り研修の効果について～特別養護老人ホームで働く看護師, 介護福祉士を対象にして～. 日本看護研究学会 第22回九州・沖縄地方会学術集会. 2017. 11. 4
【研究支援: 熊谷有記】
7. 上野洋介 (佐賀病院): 混合内科病棟におけるせん妄出現のアセスメントに関する研究. 第71回国立病院総合医学会. 2017. 11. 10-11
【研究支援: 古野貴臣】
8. 小柳聖子 (佐賀病院): 予定帝王切開術における術前オリエンテーションに関する認識—病棟スタッフ・手術室スタッフ・帝王切開術予定者を比較して—. 第71回国立病院総合医学会. 2017. 11. 10-11
【研究支援: 中野理佳】
9. 田嶋真衣子 (佐賀病院): 術後創部感染患者の創洗浄における眼周囲への体液飛散の現状～瘻孔の有無による体液飛散の差を検討する～. 第71回国立病院総合医学会. 2017. 11. 10-11
【研究支援: 室屋和子】

10. 林稔菜美（佐賀病院）：手術室での褥瘡発生状況の分析. 日本医療マネジメント学会第16回九州・山口連合大会. 2017. 12. 1-2

【研究支援：田渕康子】

11. 森田康正（肥前精神医療センター）：自殺未遂者に対する精神科救急病棟看護師の態度の特徴と特性的自己効力感の関連. 第24回日本精神科看護専門学術集会. 2017. 12. 2

【研究支援：藤本裕二】

資料：e-learning コンテンツ活用状況および内容の評価

2017年10月26日

看護学研究教育支援部門

I. e-learning コンテンツの概要および評価について

平成28年度、教育研究実践部門の継続教育で作成した e-learning コンテンツの作成主旨・概要を以下に示す。平成29年5月にコンテンツの配信を開始し、コンテンツの動画の閲覧・理解確認テストの使用が可能となった現在、e-learning コンテンツの活用状況の確認と、今後予定している新たなコンテンツ作成に向けての課題を明確にするため、調査を行なったので報告する。

1. コンテンツ作成主旨

佐賀県の看護職者が地域で活用できる e-learning の教材を作成する

2. コンテンツの概要

1) フィジカルアセスメント

対 象：学生時代にフィジカルアセスメントを系統立てて学習する機会がなかった看護職者

学習目標：①フィジカルアセスメント（呼吸・循環）の根拠を説明できる

②フィジカルアセスメント（呼吸・循環）に自信が持てる

2) 感染対策

対 象：佐賀県内の医療・介護施設および訪問看護ステーションに勤務する看護職者

学習目標：①感染対策の基本を理解できる

②ノロウイルス感染発生時の対応を説明できる

II. 調査方法

e-learning システム情報の集計および看護職者への質問紙調査

1. 調査対象

1) e-learning システム情報

アクセス状況、登録状況、テスト受験状況

2) 使用状況の質問紙調査

【質問紙調査対象者】

平成28年度に実施した e-learning についての希望調査に対して返信があった佐賀県内の施設で「佐賀大学センター事業で配信する e-learning 教材を使用してみたい」との意向を示した37施設のうち病院2施設と訪問看護ステーション2施設（合計168名の看護職者）。各施設の看護管理者に対し、e-learning コンテンツの使用依頼およびコンテンツ使用後の自記式質問用紙による調査協力を依頼し、了承を得て実施した。

2. 調査期間および調査方法

1) e-learning システム情報

e-learning システム管理者へ問い合わせ、平成29年9月30日時点で集計した。

2) 使用状況の質問紙調査

コンテンツ配信（平成29年5月15日から）後、5月下旬に対象施設へコンテンツ使用依頼および調査依頼を行った。2か月間（6～7月）のコンテンツ使用期間を設けた後、質問紙の配布・回収を8月～9月に行った。質問紙の配布および回収は、各施設看護管理者へ質問紙を郵送し、看護職個人への配布を依頼し約2週間の留め置きにより回収した。

3. 調査内容

1) e-learning システム情報

e-learning コンテンツへのアクセス数、登録数、テスト受験数

2) 使用状況の質問紙調査

属性（所属、年代、性別、職種）、ログインまでの状況、コンテンツ全体に関する意見、各コンテンツの理解状況

Ⅲ. 結果・考察

1. e-learning システム情報の集計

e-learning 利用登録者は、23施設233名（調査依頼4施設を含む）であった。一施設からの登録者数は1～46名とばらつきが見られた。

ログイン人数は、フィジカルアセスメント141名、感染対策134名であり、コンテンツ閲覧回数はフィジカルアセスメント2,921回、感染対策610回であった。ログイン人数に対するコンテンツの閲覧回数の平均はフィジカルアセスメントでは20.7回／人、感染対策では4.6回／人であり利用者には十分活用されていたと言える。小テスト受験数は、フィジカルアセスメントでは198件でほぼ全員が、感染対策は86件であり半数以上が小テストを利用していた。

2. 使用状況の質問紙調査

対象4施設に168部送付し、97部回収した（回収率57.7%）。

1) 対象者の属性

対象者は、40代が一番多く次いで50代が多かった。職種は、看護師（64%）、訪問看護師（18.6%）、准看護師（11.3%）、助産師（1.0%）であり、教育背景や職務上の役割の異なる対象者が含まれていた。

2) ログインまでの状況について

(1) 利用環境について

「職場のパソコンを利用した」（41.4%）、「個人のタブレット（スマートフォンを含む）」（29.7%）、「個人のパソコンを使用した」（21.6%）となっており、個人の都合のいい時間に利用できていたと思われる。

(2) 利用者登録について

「登録にやや時間がかかった」「登録に大変時間がかかった」が2割弱おり、登録方法に改善の必要性があると思われる。

(3) ログイン方法について

「ログインにやや手間取った」「ログインに大変手間取った」は3割おり、ログイン方法についても検討する必要性があると思われる。

3) コンテンツへの意見・要望（自由記載）

教材に関しては、「自分の都合の良い時間でみられる」、「何度も復習ができる」、「院内研修で活用したい」など肯定的な意見が多数みられた。

利用の簡便さについては、ホームページまでのアクセス困難やログイン方法に関する意見が多かった。佐賀大学の学生・職員が普段使用しているブラウザを利用しており、外部からのアクセスの利用を目的としたものでは無いため混乱が多かったと思われる。コンテンツ利用の簡便化を検討する必要があると言える。

4) コンテンツ利用に対する回答

コンテンツ「フィジカルアセスメント」および「感染対策」の内容への意見のうち、共通する部分について報告する。利用回数については97件すべてを、その他の項目については未記入回答を除き割合を算出した。

(1) 利用回数

いずれのコンテンツも1回のみ利用者が半数以上であったが、2～3回利用した者もそれぞれ約2割見られた。

(2) コンテンツの長さ

いずれのコンテンツも「丁度」との回答が最も多かったが、「フィジカルアセスメント」では、「長かった」、「やや長かった」が約3割と「感染対策」に比べ長く感じた者が多かった。「フィジカルアセスメント」はコンテンツ時間が20分であり「感染対策」の約2倍の時間を要することが結果の理由として考えられる。

(3) 内容の分かりやすさ

いずれのコンテンツも「大変分かりやすかった」、「分かりやすかった」との回答が多く、6～7割を占めていたが、「フィジカルアセスメント」では6.4%（5名）から「大変難しい」との回答もみられた。

(4) テスト問題について

「感染対策」では9割以上が「簡単だった」、「普通」と回答したが、「フィジカルアセスメント」では「簡単だった」、「普通」と回答したものは66.7%にとどまり、「やや難しかった」、「大変難しかった」との回答が33.3%にのぼった。「感染対策」のテスト問題は、コンテンツ内で説明されたものを直接問う内容であったが、「フィジカルアセスメント」ではいくつかの情報を組み合わせアセスメントが必要な内容も多数盛り込まれていたことが影響したのではないかと考える。

(5) コンテンツの総合的満足度

いずれのコンテンツも「大変満足」、「満足」が5割を超えていたが、「普通」との回答も5割近くあった。

(6) 受講目的および今後の活用方法について

今回の受講目的および今後の活用方法のいずれも「自分のスキルアップのため」が約7割の回答であった。

受講目的のその他の回答の内容は「アンケート調査のため」（3名）、「職場からのすすめ」（2名）、「上司からのすすめ」（3名）であった。

(7) 同様のコンテンツが準備されたら

全員から「また利用したい」または「内容により利用したい」との回答が得られた。「内容により利用したい」と答えた者のうち、その理由としては「途中、止まってしまいすべてみるのに時間がかかりイライラした」、「ビデオがブツブツ切れ大変見づらかった」であった。

5) 各コンテンツの内容について

各コンテンツの内容に対する結果を報告する。各質問項目において、未記入回答を除き割合を算出した。

(1) フィジカルアセスメント

フィジカルアセスメントの実施について「実施する自信が大いにある・少しある」53.4%、「どちらともいえない」39.7%、「実施する自信があまりない・まったくない」は6.8%であり、半数以上の利用者がコンテンツの視聴によりフィジカルアセスメント実施への自信につながったことが窺える。

フィジカルアセスメントの根拠の理解は、「理解できた・だいたい理解できた」78.4%であり、「あまり理解できなかった」2.7%、「理解できなかった」0%とコンテンツの視聴によりフィジカルアセスメントの知識の習得はできたと言える。

フィジカルアセスメントの学習経験は、「学生時代に講義で習ったことがある」は23.5%であり、約8割が本コンテンツの対象とした利用者であった。学生時代に学習していない利用者のうち、初めて学習する利用者は12.2%であり、その他の利用者は過去に院内外研修、自己学習でフィジカルアセスメントを学習していた。

上記結果より、本調査においては、約8割が本コンテンツの対象としていた看護職者（学生時代にフィジカルアセスメントを系統立てて学習する機会がなかった看護職者）が利用していた。加えて、コンテンツ利用により約8割の利用者が知識の習得ができ、約5割の利用者が実施の自信へとつながっていたことがわかる。

(2) 感染対策

感染対策の基礎知識については、92.4%の利用者が「理解できた・だいたい理解できた」と答えており、「あまり理解できなかった・理解できなかった」1.2%（1名）と感染対策の知識の習得はできたと言える。

ノロウイルス対策については、「理解できた・だいたい理解できた」95.1%、「あまり理解できなかった・理解できなかった」1.2%（1名）であり、ノロウイルス対策の知識の習得はできたと言える。

感染対策については、9割以上の利用者が「理解できた・だいたい理解できた」と答えており、テストにおいても9割以上が「簡単だった」と答えているように、本コンテンツにより知識の習得ができたと考える。

3. まとめ

1) 本コンテンツ登録・利用状況について

昨年（2016年）12月に実施した e-learning についての希望調査では、「使ってみたいコンテンツ」として多くの施設が『フィジカルアセスメント』（28施設）、『感染管理』（29施設）と回答していた。しかし、コンテンツ配信後の実際の登録施設は希望調査時に返答のあった施設数に達しておらず、希望調査で「使ってみたい」と回答した施設がまだ利用していない状況であ

る。本コンテンツに関しては、2017年5月に佐賀県看護協会を通じて佐賀県内施設の看護部門代表者に利用登録の依頼とコンテンツ利用の案内を約300施設に送付したが、代表者への案内であったため個人の利用者への周知が不十分であった可能性が考えられる。したがって、今後県内で開催される研修会等においてコンテンツの内容や利用者の声を継続的に紹介していくなど周知を図っていくことが必要であると言える。

2) コンテンツ内容について

コンテンツのログイン画面の分かりづらさやインターネット環境により動画が固まるといった不具合について多くの意見が見られたが、コンテンツ内容そのものについての満足度は高く、フィジカルアセスメントでは知識の習得および実施への自信につながっていた。感染対策においても知識の習得ができていたと言える。また、「自分の都合の良い時間でみられる」、「何度も復習ができる」、「院内研修で活用したい」など肯定的な意見が多数みられ、看護職者が地域で活用できる e-learning の教材であったと考える。

3) 次回作成コンテンツへ向けて

コンテンツの受講目的は、ほとんどの自分のスキルアップのために使用していたが、後輩指導、院内研修でも使用しており、今後も同様に使用したいとの意向であった。したがって、コンテンツは個人向けの内容が望まれているが、集団で使用することも考慮する必要性が示唆された。

いずれのコンテンツにおいても内容は多くの回答者が分かりやすいと感じているが、テスト問題では、「フィジカルアセスメント」で難しいと感じた回答が3割見られているため、テストの内容を検討する必要性が示唆された。

コンテンツ時間については、20分では長いと感じる者が多く、コンテンツの長さとしては10分程度が望ましいと考える。

助成金等の受け入れ

センターに対して、佐賀県看護職員キャリア形成システム支援事業補助金1,668,000円をいただいた。
(代表) 長家智子教授

センター担当者一覧 (平成30年3月31日現在)

センター長：長家 智子 (看護学科長)

副センター長：藤満 幸子 (医学部附属病院看護部長)

教育研究実践支援部門

部門責任者：古賀 明美 (研究支援担当)

副部門責任者：佐藤 珠美 (継続教育支援担当)

部門窓口：熊谷 有記 (研究支援担当)

中野 理佳 (継続教育支援担当)

担当 看護学科：熊谷 有記、中野 理佳、河野 史、村久保雅孝、末次 典恵、古島 智恵、中河 亜希、浅田 有希、古野 貴臣、杉本 健太、大坪美由紀、川久保 愛、平原 直子、坂 美奈子

看護部：松尾田鶴子、宮之下さとみ

人事交流支援部門

部門責任者：田渕 康子

副部門責任者：鈴木智恵子

部門窓口：室屋 和子

担当 看護学科：有吉 浩美、藤本 裕二、武富由美子、榎原 愛、松永由理子

看護部：原田由美子

国際交流支援部門

部門責任者：新地 浩一

副部門責任者：藤野 成美

部門窓口：福山 由美

担当 看護学科：村田 尚恵、福山 由美、柿原奈保子

看護部：松尾田鶴子

広 報

浅田 有希

坂 美奈子

キャリアアップを目指す地域の看護職の方々へ

例えば、このように考えておられる方に、

- 看護学の継続教育を受けたい、必要なところだけ学びなおしたい
- 教育者・指導者としてのスキルアップを目指したい
- 看護研究に関するアドバイスが欲しい
- 管理職として、地域の組織的な連携や人事交流を考えている
- 海外の病院や大学などとの交流や国際的な活動を考えている
- 国内外の大規模災害時の看護活動をやってみたい、等

佐賀大学医学部看護学教育研究支援センターを
是非活用してください！



連絡先

kangoc@mail.admin.saga-u.ac.jp

※問合せの際には、所属と氏名をご記入下さい。

佐賀大学医学部附属看護学教育研究支援センターホームページ

<http://scerns.med.saga-u.ac.jp/>

平成29年度 年報
佐賀大学医学部附属 看護学教育研究支援センター
—地域の看護職の質向上をめざして—

平成30年 3月31日発行

発行者 佐賀大学医学部附属 看護学教育研究支援センター
〒849-8501 佐賀市鍋島5-1-1

発行責任者 センター長 長家智子

制 作 佐賀大学医学部附属 看護学教育研究支援センター
印 刷 大同印刷(株)

〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20